

大学共通テストまで半年

学力の二極化危惧

国の大学入試改革の一環として来年1月、初めての大学入学共通テストが実施される。1999年に国立大初の入試研究部門を設置し、独自の改革を先導した東北大の倉元直樹高度教養教育・学生支援機構教授に、共通テストが今後の入試制度や学校教育に与える影響を聞いた。(聞き手は報道部・佐藤素子)

(1面に関連記事)

「共通テストは思考力、判断力、表現力を重視した問題になり、センター試験に比べ難易度も上がる。」「受験テクニック重視の出題となり、学力の二極化が進まないか危惧している。過去2回実施された共

東北大高度教養教育・学生支援機構 倉元直樹教授



くらもと・なおき 北海道生まれ。東大大学院教育学研究科博士課程満期退学。大学入試センター研究開発部助手、東北大アドミッション・センター助教授などを経て15年から高度教養教育・学生支援機構教授。日本テスト学会理事。専門は教育心理学。58歳。

ながるとの指摘もある。「本来であれば、本年度の入試はもっと時間が欲しい。受験生には責任がなく、

大人の都合だ。彼らを社会の仕組みを信用できない世代、ロストジェネレーションにしてはいけない」

「受験生をおもんばかった対応と理解できるが、第2日程は選びにくいだろう。私大入試が始まる時期と重なり、国立大の個別試験の準備にも影響する」

「国の入試改革の議論では、記述式を中心とする国立大の個別試験の重要性も再認識された。個別試験には、大学が求める学生像が表現されている。受験生は各大学の募集要項をしっかりと読み、志望大学が求める学力を養ってほしい」

「国は新しい学習指導要領で学んだ高校生が受験を迎える2024年度を、入試改革の本格実施時期としている。」「大学入試は教育の一環であり、大学自治の根幹だ。日本の教育を支える大黒柱と考え、今後も時間をかけて改善し、社会全体で守り育てる必要がある」